

教室から廊下へ出て、階段を上る。
 無人の屋上まで辿り着くと、クルルシファーは手すりに近づき、そっと眼下を見下ろした。

広い学園敷地内の景色が、ここからは一望できる。
 鮮やかな緑の中庭と、大きな学舎。

少し離れた場所に、女子寮と機竜演習場、第四機竜格納庫がある。
 そして、まだ知らない建物が、いくつもあった。

「えっと、ありがとう。クルルシファーさん」
 とりあえず一息ついたルクスは、まずお礼を言う。

クルルシファー・エインフォルクの噂は、妹のアイリからも少しだけ聞いている。
 勉強も、体技も、装甲機竜ドラッグライドの扱いも、全てにおいて一流の腕を持つ、異国の少女。
 その常人離れた美貌も含め、学園中の人間に、一目置かれている才女だ。

「助けてくれた……んだよね？ たぶん」

「子供っぽい顔の割に、意外と鋭いのね？」

「そ、それは関係ないでしょ!? 何でそんなこと言うのさ!? 気にしてるのに!」

ルクスが思わず顔を赤くすると、クルルシファーはくすつと笑い。

「旧帝国の王子様のくせに、そうやってすぐムキになるところが、子供っぽいのよ。あなたも元とはいえ皇族なのだから、こんな見え透いた挑発なんて、皮肉のひとつも交えて返してみて欲しかったわ」

「……………」

（ダメだ。同い年のはずなのに、完全に相手が上手だ）

そう、ルクスが内心へこんでいると、

「でも、それ以外は褒めているのよ? 感心しているといってもいいわ。私の意図に気づいてくれて。手間が省けたわ」

「……………えっと。じゃあ、やっぱり、僕に何か話があったの?」

「ええ、いくつもあるのだけど。まずはひとつよ」

そう言っ、透き通った瞳を、ルクスに向けてくる。

「どうして昨日——、あのとき倒してしまわなかったの?」

「……………それって、リーズシャルテ様のこと? それとも、幻神獣アビースの……」

「私は両方倒せたと思うのだけど? あなたがその気になりさえすれば——」

見透かすようなクルルシファーの視線に、ルクスは一瞬口籠もり、

「……………僕を、買い被り過ぎだよ」

数秒の間を開けて、そう答えた。

「確かに、僕は機竜使いの公式模擬戦では、一度も負けてない。でも、勝ってもいないんだよ？」

完全な防衛と回避に徹し、一切の攻撃をしないスタイルから名付けられた、『無敗の最弱』の二つ名。

だが、その名が示す通り、戦績は全て引き分けだ。

ルクスは一度も——勝利を収めてはいない。

「安心して。言いたくないことまで、無理に言えというつもりはないわ」

(し、信用されてない……!)

ルクスが項垂れると、クルルシファーは、心の声を読んだように言う。

「あら、信用なんてできるはずないでしょう？ 覗き魔と下着ドロの王子様を」

「だ、だから！ それは違うんだって——」

ルクスが顔を真っ赤にして慌てる、クルルシファーはくすくすと微笑んだ。

同じ年の少女とは思えない、気品のある笑み。

その表情に、ルクスは一瞬、ドキリとしてしまう。

「ちよつと、安心したわ」

「えっ……？」

「あなたが、思ったより無害そうな男の子だから。あまり帝国の皇族っぽくないし」

「……………」

褒められているのか、バカにされているのか、わからない口調。

でも少しだけ、彼女は楽しそうに見えた。

「仕方ないよ。だって僕は、第七皇子で、しかも——」

「童顔で背も低いし？」

「違うよっ!? その……、いろいろあって、幼い頃に宮廷を追い出されちゃったから。だから、旧帝国にあまり馴染んでなくて、僕たちは——」

クーデターが成功した後、新王国の恩赦により、ルクスとアイリは釈放された。

贖罪の印としてつけられた答人の首輪と、多額の借金。

そして、もうひとつの取引も——。

「そう」

クルルシファーはその言葉に、特に感情を見せず、素っ気なく呟いた。

「クルルシファーさんは、機竜使いのことを学ぶために、ユミル教国から留学に来ているの？」

「それも、目的のひとつには違ういわね」

なんというか、この少女は常に、とらえどころのない言い方を好むらしい。

「じゃあ、他にはどんな目的があるの？ 伯爵令嬢だって聞いたけど、新王国と交流を結ぶためとか——」

「……ねえ、『黒き英雄』って、あなたは知ってる？」

ルクスの言葉を断ち切って、クルルシファーが尋ねてくる。

「えっ……？」

「たった一機の——正体不明の装甲機竜ドラッグライドを使い、帝国の装甲機竜約千二百機のほぼ全てを破壊して、敗北へと追い込んだ怪物。所属も目的も不明。その使い手は、現在の新王国にその姿は確認されていない。故に、旧帝国にとっては滅びの悪魔、新王国にとっては、伝説の英雄として語り継がれている」

「……噂くらいなら、聞いたことはあるけど——」

「…………」

ルクスの答えに、クルルシファーは何も言わない。

ただ静かに、屋上の手すりの前で、眼下の景色を見下ろしていた。

「あの……？」

「私からひとつ、あなたに雑用の依頼があるわ」

「え？」

「『黒き英雄』を探して。私は、その人に用があるの」

「……!？」

ルクスが思わず、息を呑んだ瞬間。

ゴーン！ と、大きな鐘の音が、時計台から響いてきた。

「あ……」

「午後の授業が始まるわね。次は装甲機竜ドラッグライドの実技演習だから、急いだ方がいいわ」
それだけ言うと、クルルシファーは屋上から降りる階段へ、ゆっくりと歩いていく。

「あ、あの……。クルルシファーさん！」

ルクスが背中に声をかけると、クルルシファーは一瞬足を止め、振り返った。

自分でも何を言おうとしたかわからず、ルクスが戸惑っていると、

「そういえば、ルクス君は、お昼は食べたの？」

「えっ……!？」

「そ、そういえば、まだだったー！」

昼休みの最初はぐったりしてて、その後ゴタゴタに巻き込まれたから——。

そう意識した瞬間、きゆるる、とお腹なかが小さく鳴り、ルクスは顔を赤くする。

「がんばってね。可愛い雑用王子様」

クルルシファーはふっと微笑み、そのまま立ち去っていった。

「……………」



なんか、不思議過ぎる人だけど、今のところひとつだけ、はっきりしているところがある。
この人は、手強過ぎる、色々……。

ルクスは何ともいえない気持ちと空腹をかかえて、午後の授業を受けた。